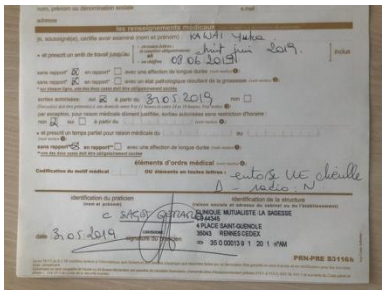
Vol. 2
28 juin 2019
Yuka KAWAI

Le Rapport de Rennes
Bien être



アバンチューは終わりをしらない…

　無事にアパルトマンを決めて引っ越しが済んで、やっとこちらの生活の基盤が確立したと思っていたところ、出勤途中に右足首を怪我してしまいました。10 年以上前、年 3 回も右足首を骨折・捻挫を繰り返したことがあり、日本ではトレーニングすることで防いでいました。渡仏してからまさに「生活するのに必死」だったため、この 3 ヶ月弱、トレーニングしていませんでした。翌日は運の悪いことに祝日で、こちらは余程のことがない限りスーパーもやっていません。太い足がさらに青紫色に腫れあがってしまい、ただごとではないため、まずは痛み止めの塗り薬を求めて開いている薬局を探し、薬剤師さんが紹介してくれた SOS クリニックに出向くも血圧を測るだけで薬すら出してくれず、バスもまばら、3km くらいを痛い足を引きずって歩きました。翌日朝一番で総合病院に行くとものの2時間ほどでレントゲン撮影（骨折ではなかった）や診察、処置が終わりました。おまけに 1 週間出勤停止のレターまで書かれてしまいました（同僚にうらやましがられましたが、結局休みませんでした）。つまるところ、フランスではかかりつけ医を受診してからそれそれ症状に応じた専門医の紹介を受けて受診するのが決まりなのでした。何もしてくれなかった SOS クリニックも「にわかかかりつけ医」になってくれていたようです。それからというもの、美容院の美容師さんやアパルトマンの受付の人に評判のいいかかりつけ医（これにも患者の waiting list があるのです）をリサーチしたり、3 ヶ月ぶりにトレーニングを開始したりしています。休日や医者のバカンス中に病気や怪我をすると、下手をすると死んでしまうことがあるから気をつけるように言われていていましたが、その意味がよくわかりました。

「日本のお母さんみつけた」

IGR での日本語の授業が 6 月 14 日で無事終わりました。日本語のクラスにいる学生たちは日本語をとてもよく勉強し、日本での自分の目的もかなりはっきりとしていました。しかし、持病があるためにその主治医をどうするべきか、という相談から、アパートはどこにしたらいいか、大学での生活の仕方、サークルのことまであらゆることを相談されました。ここでの私の役割は日本語を教えることはもちろん、日本に出発する学生たちの相談にのることです。なるべく彼らが日本で不安にならずに（多少の不便や不慣れは経験した方がいいと思っています）生活できたらと、私も細かく相談に乗ってきました。　日本語の最終授業の日は、ワールドカップ女子サッカー日本対スコットランド戦がレンヌで行われた日でした。全てが終わってから私のアパルトマンで日本食を食べる会をしようと思っ

ていましたが、スタジアムまで徒歩 15 分なので早々に観戦を決めていたので、その少し前に大学院関係者を招待しました。前年度の学年の先生方が持たせてくださった「お出汁」が大活躍、メニューはお好みトッピングできるいなり寿司、だし巻き卵、ほうれん草のおひたし、きゅうりの浅漬け、肉じゃが、焼肉、豆腐と長ネギのお味噌汁、デザートはスイカでした。こちらでは牛肉が驚くほどお安いのですが、薄切り肉がどうにか手に入らないかと思っていたところ、近所のオーガニックスーパーで穴が開かない程度の薄切りを駄目もとで頼んだところやってくれたので焼肉が実現。途中、日本語担当の先生が持ってきてくださったお抹茶セットでなんちゃってお茶会をしました。来日経験のある人には「本当の日本食をありがとう」と言われ、遠くを見てぼぉっとしてる学生に声をかけると「フランス人のおかあさんに、日本のおかあさんを見つけたと報告した」といわれ、みんなに楽しんでもらえて私も幸せな気持ちになりました。かつて大妻中野で生徒に「先生、おかあさんみたい」と言われた時に私が言っていた「こんな子産んだおぼえがない」とは、さすがに言えませんでした。

講演　’La Nature Pense-t-elle?’

「自然は考えているか？」 パリの日仏文化会館で行われた京都大学学長 山極壽一先生の講演を聴講しました。山極先生はゴリラ研究の第一人者で、大学の研究力低下の原因として国立大学法人化について、財務省主計局と真っ向対決した方ですが、そんなアグレッシブなところは見られないとても穏やかで理路整然とした講演でした。生物学の講演かと思いきや、生物学のみならずフランスならではの哲学や語学、今私が取り組んでいる他文化理解に通じる興味深い内容でした。これまでの科学は、哲学から始まり、ついで生物学、そして現在は情報学へと移行していて、「哲学が情報学にのっとられてしまう」ところまで来ている。ダーウィンの進化論は西洋では人類学に適応されず、ただ、“Man has no nature… what he has is history.”といわれ、ヒトと動物の進化は別物扱いであった。ヒトも動物と同様に進化したという考えは日本で確立された考え、というものでした。それはすべて日本の「間（あいだ、ま）」の考えに起因するするそうです。

Animal World →進化→ 間（ことば、空間、かた）→進化→ Human World

間の考えは日本特有のもので、ことばはもとより、ことばとことばの間、ハレとケを隔てる神社の鳥居、今世と来世の間の三途の川など、日本で生活する人にはその考えが自然に備わってくるのだと。もっとも興味深かったのは、霊長類の中でも類人猿は他と異なり、地球の大陸が別れる前から白目ができ、その白目の状態でことばがなくてもその心模様や立ち位置を判断しているということです。そういえばフランスに来て感じたこととして、日本では人の話を聞くときに傾聴している合図として相槌を打ちますが、フランスでは黙って話を聞くのが普通です。そのため、「聞いている？」とフランス人に訊くと「聞いている」と答える、しかし話した内容は分かっていないということがよくあるなと膝を打ちました。「目は口よりも雄弁」とはよく言ったものだと思いました。AI の発達としごとの関係が問題視されていることも、この「間」と大きく関わってきているのだと思いました。

← 最後に、私の大好きなエッフェル塔の最高の鑑賞、撮影スポットを発見しました。